

芭蕉淡花屋實記序

今ハ一むく一此は舎某の後廳ハ芭蕉翁終焉の
地なり時々つらむきハ本ハさらけをり空をまよふ皇
うけをねれハ石ハ沉み人あはるゆね元亨撰書
曰人々境留境者也誠々々ハ此言漆川ハ史
録ハ楠正成ハ戦死を聞あり歯を喰しより涙を墮
さす族ハ忠義をあらぬ人ハ繁花屋の後廳芭
蕉翁ハ終焉ハ實記をりあり決す衆洞を拭き
葎ハ世々月夜とあらぬ人ハ繁花屋ハ終焉
此日記ハあまの傳りたりとけハ風推ハ冥合



やいふは是れにふまふ先生は馬寮うゝ翁生
 涯の事実を書記し給ふまじりやんかゝるをうゝ
 蒼と車ハあゝうゝうゝ浪速河みりり
 草枕松島村河瀬大明石身ハ風雨これ行方
 多々漂泊二十年此曉は夢のいふ改るる
 面影れしうゝうゝうゝ年暮れ後うゝうゝ朽
 今風花雪月うゝうゝうゝ翁と暮るうゝうゝ此不
 可思議なり候と生値遇れ因縁と感仰より人

文化七秋八月五日

東肥七隱文曉藏

翁五上

公羽反故上 花屋日記

肥後八代 僧文曉著

浪速 花屋菴奇淵按

九月廿二日 泥足り案内く清水浮洲の葉
 橋柱一筋中葉店のみる需々短尺杯まぐ打具
 けいふ

所思

此道やゆゝ人形うゝ杖のくれ 翁
 峽れ島の木まかほ葛 泥足

毎夜十月廿三日
 御月をみ事
 花屋のまじり
 花屋菴より撰
 けいふの御
 色葉袖まの
 あり

きん十人より短のち琴仙一抄とて止む今度ハ
おれひも西國へと思ひこら給ひしと何となく
のこししと世れとるおきりおりしつとあつし
もれとや此のふとつとあつしつとあつしつと
したつしつと

旅懐

此秋を何となくとて旅雲の鳥 翁

幽玄とてつとつとつと奇にともれつとつと人同世
れれとつとつと其れつとつと思念つとつと自れつと人

の如くつとつとつとつと文字古今未嘗有るなり

惟然記

廿六日園女亭に山海は秋味とつとつと答へて婦人
つとつとつとつと敬在はははとつとつと貞潔閑雅の婦
人なりつとつとつと松坂れ人つとつと風雅ハ何れとつとつと
つとつとつとつとつと西惟中つとつとつと浪華つと
のつとつとつと惟中つとつとつとつとつと風雅の名は
とつとつと高つと惟中つとつとつとつとつと其角つと
つと人つとつと

白雲の目とつとつとつとつとつとつとつとつと 翁

お葉のふりを流と新月 園女

まじり九人奇仙のり別記

惟然記

廿九日芝柏亭に一集をくさ約儀をり一日
お積り重食し終りゆき芳らりく出席し
昔の如く候

林ありと隣ハまは氏とる人そ翁

此夜より翁腹痛はき味もみ泄瀉曰み行なり
尋常は酒をりんとおひきり茶店に胃茶湯と積り
まじりひききと験あり晦日朝日二日と押移りて


に度おまうく終りか休然とまうけり惟然支考
内議していつる良醫がも折きゆんと申けき
師曰我本元氣弱まゆゆぬ醫よとせ侍りて業
方いつらん我性ハ本節まるとあるのり於六
本節をまゆゆくとせ侍らん去來も一回はゆゆ
讀まへともあんな早く消息をおくる一
まよりあ人消息をまゆゆと京大津へはけりけり
あゆまゆ之通る亭に狭くもゆ外は同所もまゆ
人数入こみまゆ保養介抱もまゆまゆまゆ其所
此所とまゆらりつれまゆ人あゆまゆ湯堂前南久

太良所花全仁たつとそ名の裏座敷と借り交り
 間可敷ありく亭主と物敷奇と着簾より法事
 籍より後一其夜とて清少抱きし一あり於
 移りしひひり此時十月三日

次良兵衛記

四日車之角畦止凱升舎羅何中其六師の病
 と氣と云はく之道事とてたつと一と云はく
 之道より同侍り事於角よりたつと

嵐の原より
 月より以下
 あり

病氣子  一と云はく同侍り人きりも傍りて度敷に
 とつと留敷と張紙をせし且仁たつと一と云はく

霜と吉上

和帳 存置入用不請名覺英
 存置分し道具品と云

戊十月四日

次良兵衛記

次良兵衛

- | | | |
|---------|----------|-------------|
| 一 机一脚 | 一 硯一面 | 墨一提
水入小刀 |
| 一 初草盆二口 | 一 帚二本 | 火入
灰吹と云 |
| 一 夜具五流 | 一 枕 五ツ | 寺具箱
四具本綿 |
| 一 膳十人前 | 一 竈 三口 | 椀粒口四流 |
| 一 釜鍋 | 一 火箸 三 | 一口
三口 |
| 一 茶瓶掛 | 一 火鉢 二口 | 火箸法
真輪 |
| 一 茶碗 十 | 一 茶碗鉢 三口 | |

一	薄刃庖丁	三本	一	茶罐	一口
一	藥溜	ニツ	一	研木	一本
一	摺鉢	一口	一	炭斗	一ツ
一	水囊	一ツ	一	油德利	一ツ
一	鹽	ニ口	一	手水鹽	ニ口
一	行燈	ニ張	一	縣行燈	ニ張
一	挑灯	ニ張 <small>小大</small>			
一	白米	一斗	一	味噌	三升
一	醬油	一升	一	薪	拾束

蜀黍上
六

一	炭	一俵	一	油	一升
一	紙	一束	一	雞紙	一束
一	塩	一升			

右
座敷料
三俵二束
相度
右
仁右多つのりのり取書二五置

飛節便り中り年り老師一世り親り少り悪
 寧り寧り何り起り居り不り穩り之り道り不り捨り
 以り故り不り自り由り多り好り計り以り當り亦り南り久り寧

所於全仁存之重方為壽壽果拙之案
借文之道謹制之先寓居之定以之今也
別之也守分之心以極解之也豈若味也
以之早之本節之品極解也之友之平
此節之案別之也別之也此於之也
貴雅之也早之也下相持之本節之也
以極之存之也守分之心以極解之也

十月二日

惟然
支考

古本換

於別家也之本節之也守分之心以極解之也

今明之休相也之也守分之心以極解之也
泄瀉之也守分之心以極解之也
通守之也守分之心以極解之也
故之相考也之也守分之心以極解之也
胡之也守分之心以極解之也
之道之也守分之心以極解之也
同伴之也守分之心以極解之也
仁之也守分之心以極解之也

十日子夜子時

惟然

吉原松

初は六時... 本落... 幸羅... 越... 幸...

三日廿七... 休二日...

翁言上ハ

中... 一安の... 姑... 國... 日... 葉... 去...

此の事は... 其意も... にかは...
 言は... 事... 忘却不仕と
 叙行... 心... 極... 効...
 ... 又... 飛... 本...
 ...

支考記

曰... 枝子の時... 本... 二日出の
 ... 故人... 故大... 時...
 ... 一番舟... 短日... 諸子...
 ... 橋... 脈...

方逆逸湯と調合

支考記

曰... 朝解人... 参半... 道...
 ... 方... 世... 濯... 女... 師...
 ... 外... 衣... 園... 女... 四... 子... 英... 水... 仙...
 ... 送... 文... 考... 惟... 然... 女... 抱... 泣... 吾... 湯... 津... 也... 身... 子... の... 道...
 ... 心... 舍... 器... 吞... 舟... の... 為... 接... 磨... 也...
 ... 子... 今日... 三... 十... 度... 存... 招... 入... 夜... 一... 一... 重... 急... 後... 直...
 ...

次良無清記

五日朝丈草乙別正秀きくはてゝ氣争るを冬
まじし時作のゆきや師付く思きの氣りの朝迄
ま清てはゆき清ふ曇るゆふ夜は清蒲園又く五流
茶ま汁習油二升塩を升味噌之升薪二
十束炭二升目薪束二束まう今日師食した
るゆ湯素麵二箸まう夜中まあま五十度
におよ

次良無清記

六日て氣流晴まきし朝の食入藪三箸茶

終宵寐入まきし暫く睡眠したまひ目さ
うまま茶まらうめま先は野馬のうま
ま清り大井川は吟行せう

大堰川はまらうめまの月翁

此白のまらま又まらま大井川は夏まら
かまらまらまらひわらう清瀧まら

清瀧やはらうめまの青松葉翁

ま作らうま車柄ままらまら同葉まらまら
まらまら大堰川の白の松まらまら
まらまら須日園まらまら

白菊此目またてりて塵ほひ 翁

中吟一多し是又回葉の似あふれ道節あり
そを故おれ二句と一向は捨てりしめ白菊は句を採
しおま侍んとおりのけはう意いんを来洞とて
名匠はく名匠惜道と重したよ有るは終
句一章よとてめり千辛万苦ししよ病腦の
中け清骨折風雅れ陰情しと書ふは眼あり
りの何若く此句を回葉回葉とて人き思ふし此
句を回葉回葉のちりのの母根人とのあり
其の多し此句の系情別は信しめり句意をなほ

翁年五十五

此と二句やも別ありかたうゆあは裁い句は意
を別よとめり句は姿とるの青苔日厚自無
塵のまはあは隠者れ高儀をわあし語今六園
女ういふしあはあは陌上柔花調あをわあし
ゆしる吟より意も妙なり語も妙なり世人け句
をんこの園う清節をあしん波よ蒼さし語と
左大仲う必非絲與竹山水有清音とる絶
唱もおりのまき園う二丈よあはあは自潔や大舟
清籠れ遠景と二句けあわしうのあ感しと
あまりあるとてあはあは師も撰極まてあはり

去来記

七日朝より不_お名_は膳_を重_{なり}見_るも_もぬ_る樂_{あり}樂
方_は逆_に遠_に湯_を加_へ減_す入_り新_を好_むと_も園_女を_見
舞_ひと_も菓子_等贈_るは_は次_は良_き湯_を取_り計_す之
道_は贈_る鬼_貫も_も去_来應_むと_も還_る園
女_を中_の溜_り川_をる_と去_来考_へ會_を新_を終_る白_きと
め_は終_る日_を常_にお_もり_ぬ晴_る夜_は入_りぬ_人音
も_もつ_つの_ひは_は六_は打_たの_ひ人_の伽_へぬ_わは_は
ハ_は別_に正_を秀_も去_来ぬ_中け_ら今_の泉_下
け_は去_来ぬ_世に_は風_特い_るぬ_行ん

去来記上三

去来_は然_しも_も居_るり_る去_来も_も去_来ぬ_かは_は
ゆ_は忽_と二_日れ_は消_息而_しぬ_りい_ふと_もあり_きる_人と
も_もお_もひ_ぬは_はお_もい_ふ今_のね_静多_る品_今れ
静_かお_もり_ぬは_は口_は波_復お_もり_ぬ減_はれ_は流_滞を
せ_しと_もる_んも_も静_に枕_上に_は何_ひも_も機
機_とも_もい_ふ中_けら_は物_次ぬ_清な_きも_もけ_ら
お_もひ_ぬは_はた_なひ_ぬぬ_は後_は滞_れな_化ぬ_は
や_らり_ぬも_も真_行草_れと_もも_もあ_るぬ_は
も_もり_ぬ千_両萬_化す_もり_ぬも_もは_は書_とぬ_は
ぬ_はぬ_は後_もも_も地_をぬ_はも_も地_ぬぬ_は

社子美う老とおのひさひの西上人れ道心と一はひ
調へ業平の高儀とありつりし中にも藏本世あり
とおのひさひへ他は化せし事あり言ひし事
らわらぬとありていふ事ありし言ひし事あり
舟はつとありて又ありとありてありてありてあり
各筆とありてありてありてありてありてあり

惟然記

八日と氣映晴清不食より京は士ある信徳
より消息ありて病弱を同く同くありてありてあり
使來は人の擲は同くありてありてありてありてあり

海軍上士

祈望をんとして住吉大明神に連中より人をと
へて去來中おとせし事ありてありてありてあり
と清ハ電音ありて社務林采女方の祝詞をたの
厚く祈納せし事ありてありてありてあり

奉納

落つるやうな水も神あつて本草
初雪のやうな心は佐々木と正秀
啼くと鴨はさうや結さうい文章
起るは聲もさうな湯婆は支考
多仙や使つてさうな舟と舟香舟

居りし事くしむつふも家傳けり 伽香
けかりし竹はをりやとさきい 惟然
神ははくこのちりやねは風 之道
目よさしあふる顔より霜の菊 乙州
あうししれさるるやいや鶴はあふ 去来
大勢は集會よりいさふらふい無して師を慰め
申けり本節を承り申けり今朝は脈を何ん中
に次第に氣力も衰ゆるも脈解るる
最初に食滞より起り世に病も根元脾胃腎
れ名も大若れ痢疾より故に逆逆湯方

有り程又加減しあふを盡しよる薬力や
うと鄭を治法を他醫よりいふりよき来
師より師曰本節うち条をさしいふる仙方
けりく虎口龍鱗を醫はると天業いんせん
かく悟道し修る我呼吸はせいん習いふるも
本節の神をを服せし他は求むるものさし
けふ風流道德人それ同然とさし
支考乙州等去来何うさやまはさし古来
多病床に接短とさししるもさし古来
鳴名は宗師多く大朝は辞母ささるるれ名匠

此辞世にありしやと世にありしものもつとへしありし
一白を誦したる諸門人其望望ぬへし師に
まけしの言ふにゆに此辞世今日に言ふにありし辞
世我生涯を捨つ白く一白くありし辞世にありし
のし善哉辞世にいうと同人ありし此年頃
捨おきし白くつとありし辞世にありし
諸法從來常示寂滅相ありし是釋尊に辞
世にありし一代に佛教此二白く外にありし古也
とていひしありし音此白く我に風を與せしと初て
辞世にありし其後百千の白くを吐きし此意ありしと
し

續々五十三

あふにありし白く辞世にありしとありし
と此意にありし音ありしとありし
と語にありしと此語實に玄く微妙なるに人
らありしとありし

支考記

おののありし漢書に野のありしとありし
消息ありし今日ありし伊賀ありし音ありし
中候ありしとありしとありしとありしとありし
師にありし我意にありしとありしとありしとありし
里の飛杖ありしとありしとありしとありしとありし

ぢい我過より今大病をうらむ一類中れき
つれづれにまじりて買りあへり思ひをたし今度
大切におもひも汝はあつていつかひける師に
急げ汝きあへ各感念に度敷六十夜におよ

惟然記

九月諸子に取らるるしあつた衣笠又松果
白とれ垢つきる不淨あつて脱ぎかへる衣笠を
うらむ中師曰我道地波濤に浮るる草を
安藤塊と乾くも終つては身はかゝる美く
しれ禪けし人よあつても未來きくは友とらうん

しく鬼録とらむと受生れ本望より文章士と
と召略夜目けあへるも不浄棄入り吞舟に
半せきり各録したる

梅の病多し憂い枯野とかげ白紙

枯野とめぐる憂心も一枯るるもさあまを
辞せよあつて辞せよつれづれもあつて病中
けしむ架候う保生おれ一大事とあつて色
かゝるつらま生涯ぬも一風流と云ひ
是も毒執れつらまのへけん今いふるま
云々あつて月も朝雲暮雨は男も地は山水

錦鳥好く思ふもよめたる心身風雅なる
さうさかゝる河魚好患つらき終ひまう今
とけふなるに其風神れ名章と唱へ終ふ事
法門業れまう他門に因て未代に龜鑑なり
少沖とて紫洞を流る眼ありの是とてハ魂紙
飛さし耳にの是とてさけ毛鬢らけさる
動心列坐せ而感慨悲想一多恸絶一
多語りて是師翁一代遺教終る此日を
終るに地後人きまて度教ら終る

去來記

十日初回自せと師叔おめうとて度教志まに
ひし不醒もまて人の打もは流るらうあやを
とあふさふと多し本師此日芍薬湯をり諸子
打らるる食事すめあつたせけまてすきたるを以
梨宴をけうたさし本師かく割けまて頻に
に望いたさしゆあやむとむんさあけまて一斤
味ひあやむしゆ本師云脾胃うるまの死
期らうまらう申せ下刻まらう人こち
つきたる今日の一人も食らるるの事

惟然記

十百胡をくしつ時雨はけりしうもれく東武は其
角さるは是ハ東武は誰彼同伴のありさ宮井
序和為紀州を打あうる泉乃るを信義の打入り
しうはしるも師は常におもてあつてもうと此
とらつていさるる漸にうあつひきりてさるる病はま
わらぬは骨連さし移しける辨をんすあてて目
愁ひ目もさるる師もえやうたしひしうもくは
唯く同くみしる其角もま白のくさうつはまお
きりしと本草を来支考其外は尻次は同り
扱さる病性始終を扱さる此扱夜さるる扱

あまのいりら一筆のあつて茶居のいりる
しるる師はれさるるしう粥を治したる人
娘さるかさるるはさるる治ししあはれはさるる
すあまのいり中を扱さるあはれはさるる朝日
と来れ食事なり出給に治したるさと来扱さる
つしあまのいり

病中はつらさるすしあまのいり
去来曰越向と他よりあはれはさるる
あまのいりを治さるるあはれはさるる
あまのいりを治さるるあはれはさるる
あまのいりを治さるるあはれはさるる

きんぐと書りつゝは次は同の字にけり支考も
さういふのいひもさう法子はさるる面目さう
ゆゑ行々惟然と打じり我よりうりまゝ後人
とんじり

さういふは次はさういふにきり 支考
さういふ支考まじりて六師もかれは法にひくおひり
後ひけり

これ三好房の
その枯尾を
に
はるゝとて葉あり
くわん夜ゆか
こまゆんこは虫
さういふん
とあり

葉とて菜飯
皆子なり
うらまゝいふれりとのまゝなり
本草
乙州
支草



翁堂三

吹井と鶴とさういふ初とて 其角
一々惟然と書りけり六師支草とて今一度と
のうらまゝいふ支草とてさういふ
綱より面白くさういふとてさういふ
ありいつかさういふ様はさういふ
帯一人熱とてさういふ其角とて
本草と病と除中けりさういふ大病中能合
かゝる飯と食れとてさういふ悪と病あり
さういふとてさういふ
すゝりるも又寒熱往来りつゝねりる顔

美を以て... 暫くは回覧一人も...
 舎羅吞舟... 又案証... 左...
 分抱... 補... 其角...
 寸許... 行水... 頻...
 ... 湯... 醫術...

又謝し... 州正...
 ... 支考... 伊賀... 尾張...
 ... 始終... 人...
 ... 喘...
 ... 河... 梨...
 ... 州... 送...

清人の霜と可憐に侍りしは、
多雪井に余りたる侍らぬ彼、数年は薪
水は常勢にわたりおし我らなれどもおし
え終りしは風流交りし人此りたのむ
諸國をばはるはるの縁をたしりて余
言る一合掌たりし歡音經をよみかす
可し良れどもしききり申れり過く煙火の
たしりしは、
しりしは、
終る属曠しりき終りし時、元禄七甲戌十月

十二日申れ中刻法年五十一歳より
昂刻不淨を法より白木に長櫃に納りわしせし
あり川舟にあり伏見にありしは、
其角吉来丈草に別正秀本甚惟然支考
之道吞舟に是雨以上十一人花至仁方あり
京へ荷物を送り、
また念佛誦經ありしは、
頃夜もありしは、
海より舟に逢はせしは、
また抱きしは、
程より京橋にけり、

通のよからるるをいふに十三年に於て
よき大はれし州をいふに入るるをいふに伏
見の先をいふにゆりけを掃除し
めは浴衣用意といはれし道吞毎法を
心懸けたしとせし六月代入文章法師の
けり清法衣淨衣等ハ智月とし州を妻
淨衣白衣のあはるるをいふに
いふに年々を兼て紫衣の衣を
いふに紫衣の衣を兼て紫衣の衣を
衣も紫衣の衣を兼て紫衣の衣を

日と定て彼は口及びなかりし

大坂を全うし支考惟然るるは仕出れ
寺に僧侶勢を急用するを
せしは是幸しとれつるに
目より漸疾しく歩行するに
高き階に上りて朝伊賀と
同つてはたけは仕出に
しりよと野は福よけり
と大に驚きしと云ふ



はらうのしほ

土草物語
早稲

十丁の量と休をと出毎にたつ高昌居控其
北玄曲翠等ハを扱何とて多行遠しとわ
らむおめく大坂の急由のたふとてとてと法
子清歌とよりなることありしはとてとてと
とて又十丁は昼飯の大坂を引くこととてと
た刻とありとてとてとてとてとてと

昌房物語

義仲寺真愚上人住職より六道寺師より三井寺

翁聖三三

常住院より中子三人ありし讀經念佛ありし
入檀ハ其夜雨は刻より諸門人通ねしとて
此一方をとり付ありしとて左右外より其角
乙州等評議し多式ありし十四日雨上刻
と相親心直なりしとて集行し人のを慮れと
悟しひとて人敷凡二百人餘ありしとて
日暮る老若男女ありしとて悲しむ時とて小春
はとてとてとてとてとてとてとてとてと
水の面をかやと渡りしとて粟津は川と吹起
るはとてとてとてとてとてとてとてと

雲の影をうつすのこゝろに
りのおもひをいふ矢橋は
事あり大胸より洞と云ふ

支考記

引導香語

雪月魁魍風花精神等因一句驚
動人天嗚呼奇哉芭蕉妙哉芭蕉
萬里白雲一輪明月五十一年一
字不說

翁堂正

各檢香

丈草	其角	去來	李由	曲翠	正秀
木節	乙州	臥高	惟然	昌房	探芝
泥足	之道	芝栢	北玄	尚白	土芳
卓袋	許六	丹野	風國	野童	遊力
野明	角上	胡故	蕪葉	靈椿	素聲
田島	萬里	識々	這萃	荒崔	楚江
木枝	扑吹	真光	支考		

諸國代香不記

右此版近江中... 及々々京大坂美濃

尾張伴勢とみおくしる京のよみわたり
諸國此人の三世値遇の縁をうけし我もく
少香の向をふ其教何百人といふ教しき境
肉獲けし表より入る人をも裏へめあはるやうに
あつしひ並田に刈取らるしつちを焼香人々
をさふ裏へめあはるしきさうして證しき事ぬれ
く葬埋をりけし子にけしよさうにけしあはるく
遺令に通る日本曾殿にたのうし煙を葬しなり
けし

十六日去來其角うめ膳所大付の人の朝庭

箱吉上世

箱吉上世の御出さるりもく卵塔をこころ幸
む塚にうしるよ年あたる柳のうしるしき
清名に形えしゆ枯れに色葉を一本兼くこけ
糸しる葉に木の今を著るる花のよもよほし
柿の竹のゆめ垣のいさしき花をよ向なるも葉
日れりて廣しといふも生前のよ各豊せ草原に
浪の響ふ其徳美著れ絶頂の語よ人丸赤人
けむしるいさしきよ未代は今しるも人響し我翁
一人のしるし

以一抽再形存什物

多味 雪芝豆
豆末 甘藷
豆末 糖維
十人 半殘
豆末 土芳

清史之... 候時... 豆末... 糖維... 十人... 豆末... 土芳...
清史之... 候時... 豆末... 糖維... 十人... 豆末... 土芳...
清史之... 候時... 豆末... 糖維... 十人... 豆末... 土芳...

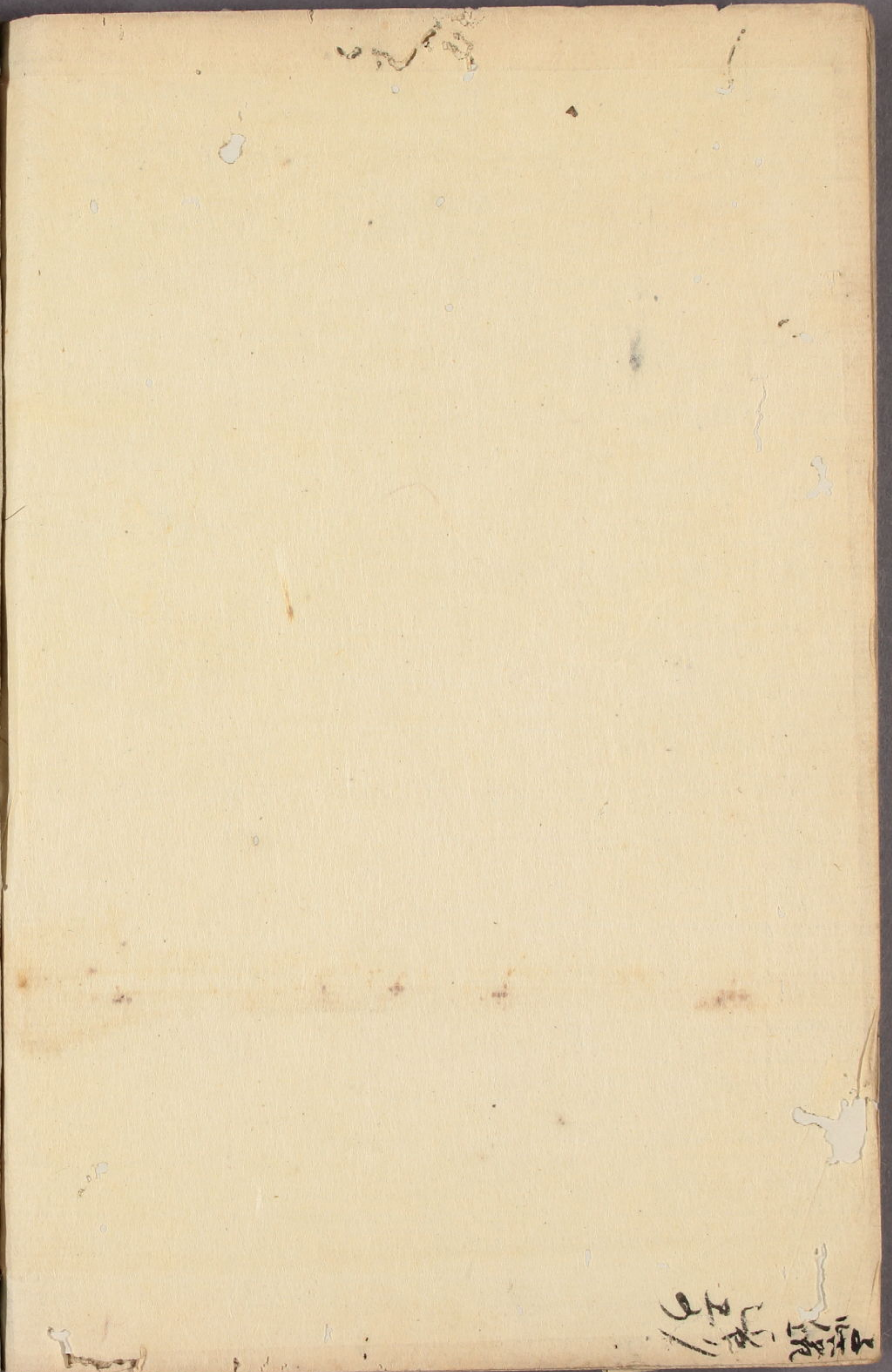
十月十日

松音 立

松尾建方印

新藏の... 骨... 新...

公羽 及 故上 畢



五經
卷一

